『　ハゲワシと少女　』

一九九三年三月、ヨハネスブルグの有力な報道カメラマン、ケビン・カーターは、セスナ機を使って仲間と共にスーダンへ強行潜入した。アヨドという村で彼が目にしたものは、強行潜入成功の喜びと興奮を吹き飛ばすものであった。毎日、十人程の子どもが死んでいた。絶え間なく襲うハエ、子どもの鳴き声。また、泣くことすらできないで骨と皮だけで横たわりじっとしている子ども。彼は、最も地獄に近い場所だと感じた。

体中に戦慄が走り、どうしていいのかわからない。目を伏せたくなるこの光景をしっかりと見すえ、写真に収めなければならない。息を大きく飲み込んで、体を鉄のように固くさせなければ、この現実と向かい合うことができないケビンであった。村から出て、たった一人で歩き始めた。ただ、村から離れ、できるだけ遠くに行きたかった。子どもの鳴き声が聞こえない静かな所でただ静かに思いをめぐらせてみたかった。

ケビンは、砂漠に向かって一キロメートル程離れたところで、一人のやせ衰えた少女を目にした。その少女は、２歩３歩と歩いては立ち止まり、また歩いては立ち止まっていたが、ついによろよろとその場にうずくまってしまった。少女は、甲高い声をあげて手を膝にのせ、必死に立ち上がろうとしていた。ケビンは、その場を通り過ぎた。しかし、その少女のことが気になり、その場に引き返してきた。すると、どうだろう。少女のすぐ背後にハゲワシが舞い降りてきていて、少女に近づこうとしているではないか。

その瞬間、報道カメラマンとしての本能が彼に「写真を撮れ」と命じたのだった。今、目の当たりにしているこの状況を強烈に受け止めた彼は、シャッターを押した。写真を撮り終えた彼は、十分な手ごたえを感じるとともに、すさんだ暗い気持ちに襲われた。大スクープがやっと撮れたという安堵感とは程遠いものであった。

その後、ケビンは、ハゲワシを追い払い、少女が歩き出したのを確認した。そして、彼は木陰に歩み寄ってしばらくの間、声を出して泣き続けた。

彼が撮った写真は「ハゲワシと少女」という題がつけられ、この写真で一九九四年度、ピューリッツァ賞（報道カメラマンにとってノーベル賞と同じくらい価値がある賞）を受賞したのである。スクープをねらう報道カメラマンとしては、見事に「世界的なスクープ」をものにしたのである。

この写真は、各国に大きな反響をよんだ。アメリカでは、大きな議論が起こり、特集番組も放映された。